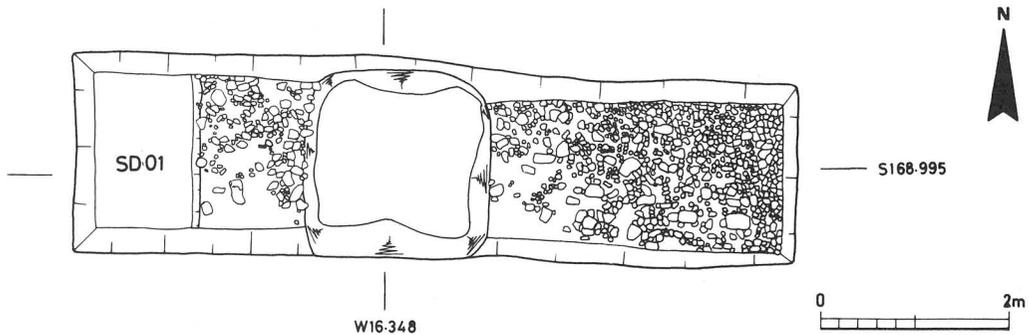


## 飛鳥寺周辺の調査

(昭和56年4月)

飛鳥寺周辺では、寺域推定地の西方で発掘調査を実施した。この調査は、集会所建設に伴う事前調査で、調査地は西面築地推定地の西約15m、飛鳥坐神社へ向かう道の南側にあたる（P.47、位置図参照）。調査は南北2m、東西8mの調査区を設定して行った。層序は上から整地土、暗灰褐色粘土、茶灰褐色粘土、淡緑灰色粘土、暗褐色土、茶灰色砂質土、暗褐色バラス、茶灰色バラスとなり、地表下1mの暗褐色バラス上面で礫敷を検出した。暗褐色バラスより上層には中世以降の遺物が多く含まれていた。調査区中央は、東西長2.1mの防空壕が掘られており、その部分からは陶器・ガラス片などが出土している。礫敷は防空壕の西へさらに1.2mほど続き、溝状のSD01にこわされている。SD01の時期は明らかでない。礫敷は拳大の礫を敷きならしたものであるが東側で高く、西側で低い。調査区内での比高差は0.2mである。去年のB調査区(概報11)でみられたような段状の作りはみられない。

礫敷面からは、時期を決定できるような遺物は出土していない。したがって礫敷の年代や性格について明確にし得ないのであるが、飛鳥寺西方地域で奈良県や当調査部で行った調査で、これまでに明らかにされた石敷と同様な性格をもつ遺構と考えられる。



遺構配置図(1:80)